

## ブラウン管のリサイクル等に関する検討について

### 1. 合同会合における議論の経緯

家電リサイクル制度の施行状況の評価・検討に関する報告書※1)では、ブラウン管ガラスカレットについて、「国際的にブラウン管テレビから液晶テレビ・プラズマテレビへの転換が加速化している状況の中、その需要が減少傾向にあり、他のガラス用途への転用も技術的に課題が大きい。したがって、引き続きメーカーのブラウン管ガラスカレットの再商品化に向けた販路開拓努力等を継続しつつ、その再商品化の在り方について将来的に検討していく必要がある。」とされている。

また、特定家庭用機器の品目追加・再商品化等基準に関する報告書※2)では、「ブラウン管ガラスの再商品化が困難となるような将来的な事態を想定し、処理のための試験や取扱方法等の個別対策のみではなく、業界をまたぎ関係者一同の関与の下で、対策を進めることが適当である。また、ブラウン管ガラスカレットの需給予測、各種リサイクル技術等を幅広く検討した上で、状況に応じて柔軟に対応できるブラウン管ガラスカレットのリサイクル等に関するロードマップを検討することが適当と考えられる。」とされている。

これらを受け、昨年度の合同会合において、「検討の進め方」として次の内容を提示している。

- (1) 海外での水平リサイクルの今後の推移や、水平リサイクル以外のブラウン管のリサイクル・処理の現状と今後の見通しを調査・整理する。これを踏まえ、資源の有効活用という観点からリサイクルを優先しつつも、有償及び逆有償でのリサイクルを行っても余剰量が発生する場合は埋立処分も視野に入れ、これらの手法に係る技術的課題の検討を行う。
- (2) 上記検討を進めていくため、学識者、業界関係者等の参画を得て、京都大学の酒井伸一教授を座長とする検討会を速やかに設置し、検討を開始する。

※1) 産業構造審議会環境部会廃棄物・リサイクル小委員会電気・電子機器リサイクルワーキンググループ 中央環境審議会廃棄物・リサイクル部会家電リサイクル制度評価検討小委員会合同会合：家電リサイクル制度の施行状況の評価・検討に関する報告書, (平成20年2月)

※2) 産業構造審議会環境部会廃棄物・リサイクル小委員会電気・電子機器リサイクルワーキンググループ家電リサイクル制度における品目追加等検討会 中央環境審議会廃棄物・リサイクル部会特定家庭用機器の再商品化・適正処理に関する専門委員会 合同会合：特定家庭用機器の品目追加・再商品化等基準に関する報告書, (平成20年9月)

### 2. ブラウン管ガラスカレットを取り巻く状況の変化

昨年度の合同会合時点では、リーマンショックなどの影響によるガラスカレットの海外需要の減少とブラウン管式テレビの排出量の増加予測が重なり、ガラスカレット

のリサイクルが困難になる事態が想定されたため、先述の検討を開始する旨報告した。

しかしながら、その後、徐々に海外需要は回復し、当面は、日本のブラウン管ガラスカレットの処理をまかなうことができる状況で推移しているとの報告を製造業者等から受けており、ガラスカレットの処理方法として最も望ましい水平リサイクルが当面は順調に行われる見込みであることから、急ぎ検討会を開催して、対応方針をまとめる状況ではないとの意見もあった。

したがって、製造業者等による輸出の今後の推移を注意深く見守っていくとともに、家電リサイクル法の適用範囲外であるため合同会合当時には想定していなかった、製造業者等以外の廃棄物処理業者によって処理されているブラウン管ガラスのリサイクル状況の調査を行い、今後の進め方を検討することとした。

このような中、今般環境省が自治体に対して行ったアンケート調査により、義務外品や不法投棄された廃家電の一部が埋め立てられている事実が判明した。特定家庭用機器のブラウン管ガラスカレットについては、これまでは埋立処分を想定していないため、当該ブラウン管ガラスカレットに係る処分基準については整備されておらず、早急な対応が求められている。

### **3. 検討の進め方**

以上を踏まえて、環境省においては、京都大学の酒井伸一教授を座長とする「ブラウン管ガラスカレットのリサイクル・処分に係る技術検討会」を設置し、以下の項目について検討を行い、年度内を目途に一定の結論を出すこととしている。

- ・ブラウン管ガラスカレットを取り巻くリサイクル・処分の状況と課題
- ・ブラウン管ガラスカレットのリサイクル・処分技術の評価
- ・国内で埋立処分する場合の処分基準案

なお、特定家庭用機器の品目追加・再商品化等基準に関する報告書で記載されている「状況に応じて柔軟に対応できるブラウン管ガラスカレットのリサイクル等に関するロードマップ」については、ブラウン管ガラスカレットを取り巻く状況の変化を踏まえれば、昨年度時点と比較して緊急的な策定が求められている状況ではないと考えられる。したがって、ブラウン管ガラスカレットを取り巻く状況を注視しつつ、まずは、上記技術検討会での検討を優先的に進めるものとする。